

環境要因型製作活動への提唱

—— 子どもの思いがいきる一斉保育の製作活動 ——

自然幼稚園 坂 田 葵
教育学科 高 橋 司

抄 録

幼稚園教育は、子どもの主体的な活動が基本であるが、一斉保育を教育の主軸としている幼稚園の製作活動では、保育者主導型であることが往々にしてある。そこで、一斉保育の中でも、子どもが主体的に学ぶことができる「環境要因型製作活動」を、年少組を対象に実践した。その結果、個々の発想をいかした表現の表出、思考力・判断力の芽生え、イメージを膨らませてかたちにする表現力・創造力、巧緻性、言葉のやりとり・人とかかわり、意欲・集中力の高まり、子ども同士の育ち合い、学びの積み重ねの発揮という8つの育ちが見られたことを、環境要因型製作活動の意義とし提示した。さらに、環境要因型製作活動における子どもの育ちを支える援助について、意欲を引き出す導入、イメージが膨らむ導入、素材の量・種類・質についての配慮、それぞれの取り組み方の尊重、子どもが主体であるという考え方、計画的かつ柔軟な保育の展開、保育者のかかわりという7つの視点を明らかにした。

Key Words：幼児教育 一斉保育 製作活動 子ども主体 環境要因

1. 背景と目的

筆者は、子どもが主体的に過ごすためには、一人ひとりが尊重され、それぞれが集団の中で自己発揮できるようになることが保育の基盤になると考えている。また、発達課題を踏まえた子どもの姿や遊びの様子をよみとり、何に興味をもっているのか、どのような経験が必要であるのかを考察し、保育計画を立てたり環境を整えたりすることで、子どもの主体性を大切にしたいクラス運営・保育の展開を行い、子どもの育ちを豊かにしていきたいと考えている。

幼稚園教育要領でも、幼稚園教育の基本は、「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行う」こととしている。その中で重視されるべきことと

して、「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」や「遊びを通しての指導を中心として（中略）ねらいが総合的に達成されるようにすること」、そして「幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること」の三点が挙げられている。さらに、幼児期の子どもを支える保育者の役割として、「幼児の主体的な活動が確保されるよう¹⁾」にすることが必要であるとしている。これらは、幼児の発達特性を踏まえ、保育者主導ではなく、幼児の主体性を大切にしたい保育がなされなければならないことを示している。

しかしながら、幼稚園で実際に行われている保育は、保育者主導であることが少なくない。

特に、一斉保育を教育の主軸としている幼稚園の製作活動では、保育者があらかじめ考えた着地点にたどりつくような指導の展開で終始されることが往々にしてある。

武内（2014）は、「一斉活動で教えようとするものは、みんなで同じことをするようになるために毎時間集団の枠にはめることをねらうもの²⁾」として一斉保育を捉えている。しかしこのような捉え方では、個々の表現や個性は十分に発揮されず、子どもの主体性は生かされないであろう。一方で、山田（2017）は、環境設定型の表現活動が、子どもの気付きを引き出し、表現の幅を限定することなく、無垢な表現、純粋な表出につながると述べたうえで、今後の課題として、子どもの自由な発想を引き受ける活動主題とする保育計画の在り方について検討する必要があることを述べている³⁾。また、片岡（2019）は、幼稚園教育要領の改訂で示された3つの「資質・能力」、つまり「知識および技能の基礎」「思考力、判断力、表現力などの基礎」「学びに向かう力、人間性など」に沿って製作遊びの中での育ちを確認している⁴⁾。しかしながらその育ちは、自由遊びに限定されているものであって、一斉保育における製作活動については言及されていない。さらに、若山（2013）は、幼児の創造的な造形的見立てを取り上げることが、子どもが自分の気付きに自信をもつことや、幼児期以降の土台となるという意義があることを述べた上で、どのような手立てによって創造的な造形的見立て遊びを計画的に援助するか、特に、描く、つくるといった造形行為を伴う創造的な造形的見立ての援助について、また、造形的見立て遊びが、幼児のどのような発達の側面と関連しているかについて、検討することを課題としている⁵⁾。

そこで本研究では、一斉保育の中でも、子どもが主体的に学ぶことができる製作活動を行えるよう、環境から着想を得たり製作への意欲をもてる

ようにしたりし、子どもの発想やイメージをもとに取り組んでいく製作活動（以下これを「環境要因型製作活動」と呼ぶ）の実践から、環境要因型製作活動の意義や、環境要因型製作活動において、子どもの育ちを支える援助はどのようなものかについて明確にすることを目的とする。ちなみに、ここでいう環境とは、空間にとどまらず、人・物・事象等を含めたものである。

以下、第2章では、筆者が担任する年少組を対象に、一斉保育の中で雛祭製作を課題とした環境要因型製作活動について実践した内容を示す。次に、第3章では、実践から見られる子どもの育ちと、子どもの育ちを支える援助について考察する。第4章では、一斉保育における環境要因型製作活動を取り入れた実践についての成果と今後の課題について言及する。

2. 実践内容

本章では、筆者が行った実践研究の内容を述べる。まず、2-1.で、実践研究の対象を示した上で、2-2.では、製作対象に関心をもてるように行った導入について、続く、2-3.では、製作自体への興味をもてるように行った導入について述べる。そして、2-4.では製作活動の1日目について、2-5.では、製作活動2日目の実践について報告する。

2-1. 対象

本実践は、平成30年度に筆者が担任している年少組（つばみ組）を対象に行ったものである。つばみ組は、男児11名・女児9名の計20名で構成されている。そのうち15名が平成30年4月2日入園、5名は平成29年6月1日に入園した満3歳からの進級児である。

本稿では、雛祭製作を対象に、環境要因型製作活動を取り入れた実践を行い、その中で見られた子どもの姿や言葉、完成した製作物などから、子どもの育ちや保育者の援助について分析する。

2-2. 雛飾りに関心をもつことができるようなしかけ

実践日／時間／場所		平成 31 年 2 月 19 日（火）／10：00～10：30／ホール
ねらい	雛飾りに関心をもつ。	
事前準備	ほぼ毎週月曜日（代休明けは火曜日）に、全学年が集まって行う仏参があるため、雛飾りが子ども達の目にとまるよう、事前にホールに飾っておく。	
流れ	子どもの姿・言葉	保育者の言動・援助・配慮
ホール入室	<ul style="list-style-type: none"> ・「なんかある!」と普段ホールにはないものがあることに気付く。 ・雛飾りをみて、「お雛様や!」と言う子どもがいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ほんとや。何やろう」と子どもからの気付きを待つ。 ・子どもの声を受け止め、雛飾りを発見した喜びに共感する。
仏参	<ul style="list-style-type: none"> ・仏参中も、雛飾りに目を向ける様子が見られる。 ・保育者の「近くで見える?」という声に対し、「見る!」「やったー!」と答える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが雛飾りに関心をもつ姿を受け止める。 ・興味をもつ様子を捉えて、雛飾りを近くで見ることを投げかける。
雛飾りを見る	<ul style="list-style-type: none"> ・雛飾りへの興味から、雛飾りが置いてある場所まで走って行ったり、笑顔で向かったりしている。 ・雛飾りに触れたり、なるべく近くで見ようと前に詰めたりして、興味をもっている。 ・「家にもあるで」「前見たことある」と保育者に伝える子どもがいる。 ・「これ何?」とぼんぼりを指さす子どもがいる。 ・灯りがついたぼんぼりを見て、「わあ〜っ」と歓声をあげたり「え〜っ、なんで!?!」と突然灯りがついた様子に驚いたりする。 ・保育者の問いかけに対し、「桜」と答える子どもがいる。 ・橘を見て、「きんかん」や「みかん」と答える子どもがいる。 ・女雛と男雛を見て、「お姫様」「お雛様」「お内裏様」と口々に伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと一緒に雛飾りを見に行く。 ・名称を伝え、「うれしいひなまつり」の歌の一部分を歌いながら、そっとコンセンをさし、ぼんぼりの灯りをつける。 ・子どもの喜びや驚きに共感する。 ・桃の花を指し、「これは何のお花でしょう」と子ども達に尋ねる。 ・「桜が咲くにはまだ早いなあ」と子どもの声に応じながら、正解を伝える。 ・橘を指し、「じゃあこれは何の仲間でしょう」と問いかけ、子どもの身のまわりにある果物と関連付けて橘について知らせる。 ・女雛と男雛を差し、「この人達のこと、何ていうか知ってる?」と問いかける。 ・子どもの声を拾い上げ、「そう、お雛様やねえ」と答える。

<ul style="list-style-type: none"> ・保育者が男雛の烏帽子をとって人形の髪型を見せると、「え〜!」「何それ!」と言ったり笑ったりしている。 ・保育者に促され、「烏帽子」「冠」と声をそろえて言う。 ・保育者の振る舞いを見て笑う子どもがいる。 ・雛飾りについて問われ、無言で首をかしげたり、目が合うとはにかんだりしている。 ・「みんなに見せてはる」と答える子どもがいる。 ・保育者に、「何をみんなに見せてはるのか」を尋ねられ、同一の子どもが「踊るところ」と答える。 ・嫁入り道具の一部を指さし、「じゃあこれは何なん」と尋ねる子どもがいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「昔と今は、髪型が違うねんで。どんな髪型してはるかな?」と男雛の烏帽子をとり、子ども達に見せることで、人形に関心をもつことができるように導く。 ・「お内裏様がかぶってはるのは、烏帽子っていいます」と名称の部分をゆっくりと伝え、強調する。 ・「お雛様のは?」と尋ね、少しの沈黙の後、「冠」と名称をゆっくりと、やや大きめの声で伝える。 ・烏帽子を指し、「これは?」と名称の呼応を促す。 ・同じく、冠を指し、「これは?」と名称の呼応を促し、人形の特徴について目で見て、言葉にすることで、印象付けられるよう配慮する。 ・「お内裏様がおててに持ってはるものは何ていうか知ってるかな」と問いかけ、答えがないのを確認し、「笏、お雛様のは扇」とそれぞれの名称を強調して伝える。 ・「お雛様とお内裏様は、扇と笏にメモを書いてはったんやって」と伝え、扇・笏を見て「ん〜なににな、ああ、そういうことね!」とメモが書かれている想定をし、ユーモアを交えながら扇と笏の用途を伝える。 ・「お雛様とお内裏様が、何してはるところわかる?」と子どもに問いかけながら、雛飾りや保育者と応答的にかかわることができるように援助する。 ・問われたことについて、知らない中でも、その子どもなりに考えて答えを出していることを認め、笑顔で受け止める。 ・「これはね、お雛様とお内裏様の結婚をお祝いしてはるところやねん」「この下にあるのが、お雛様が結婚するときに持ってきた道具なんやって」と装飾品の意味を伝えながら、雛飾りについて理解を深められるよう援助する。 ・「これ（籠）はお雛様がお内裏様のところに来るときに乗って来はった籠。昔は電車とかなかったから、お雛様は、この籠に入って運んでもらわはってんて」と、子どもの質問に答える。
---	--

<p>保育室に戻る</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一人の子どもの質問に保育者が答えたことで、「じゃあこれは？」とそれぞれに気になる道具について保育者に尋ねる。 ・保育者のそぶりを見て、友達と目を合わせながら笑っている。 ・保育者の声を受け、三人上戸のそれぞれの表情について「怒ってはる」「泣いてはる」「笑ってはる」と答える。 ・保育者の言葉に応じ、身振りを交えながら声を出して“怒る”“泣く”“笑う”という感情を表現することを楽しむ。 ・三人上戸について聞いたり見たり、自分たちで表現することで、他の人形にも興味をもち、「この人達は何なん」と保育者に尋ねる。 ・保育者と一緒に人形の数进行数える。 ・「たいこ」「笛」と口々に答える。 ・「この人は？」と他の人形についても尋ねる子どもの姿が見られる一方、時間的に集中が途切れている子どももいる。 ・「(お膳に) 何入ってんの?」「見せて」と保育者の「ご馳走」というキーワードから、お膳に興味をもつ。 ・何も入っていないお膳を見て、「何も入ってへんやん」と言う子どもがいる。 ・右大臣・左大臣についても「この人は?」と尋ねる子どもがいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの声をもとに、「これは鏡。私きれいなあって見はるんかな」と道具について伝える。その後、鑑道具の鏡を手に取り、保育者自身の髪を触って整えたり頬にのひらをあて笑顔でポーズをとったりしながら道具の使い方を知らせる。 ・三人上戸をについて「この人達、どんな顔してる?」と問いかけ、一つ一つの人形に違いがあることに気付けようにする。 ・「お酒飲んだら色んな癖が出るんやって。みんなも怒り上戸やってみて」「泣き上戸は?」「笑い上戸!」と表情を真似るように促し、人形とのかかわりを深めていくことができるように配慮する。 ・「この人達は何人かな?」と問いかけ、人形の数进行子どもと一緒に数えてから五人囃子について伝えることで、五人囃子の印象が残るようにしたり、子どもが主体的にその場に参加したりすることができるように配慮する。 ・「何持ってはる?」と子ども達に尋ね、五人囃子の役割について考えられるように促す。 ・「この楽器で音を鳴らして、結婚のお祝いをしはるみたい」と伝え、人形の装飾品から五人囃子の役割を結びつけられるようにする。 ・「この人達は、お料理をする人」「お雛様とお内裏様のお祝いやし、ご馳走をつくらはるねん」と手短に答え、興味をもつ子どもと集中が切れている子どもへの配慮をする。 ・お膳を子ども達に見せる。 ・「もう食べはったんかな」「先生と一緒に食いしん坊なんちゃう」と答える。 ・「この人達は、右大臣・左大臣。お雛様とお内裏様を守ってはるねん」と手短に答える。 ・子どもの問いが少なくなってきた頃合いを見て、保育室に戻ることを投げかける。
---------------	--	---


【考察】


雛飾りを見に行くという設定を行わなくても、子どもの導線に雛飾りを配置することで、子どもの関心が自然に雛飾りへと向いていった。雛人形について尋ねると、「お雛様」という声が挙がったように、雛飾りを見たことがあり、雛人形について知っている子どももいたが、他の人形や道具などの詳細については知らない、あるいは、聞いたことがあっても記憶に残っていない子どもが多くいた。そこで、子どもの興味を引き出せるように質問をしたり雛飾りを取り上げて示したりすると、疑問に思ったこ

とを保育者に尋ねたり、関心をもって話を聞いたりして、雛飾りへの興味を膨らませていく様子が見られた。また、子どもと保育者との応答的なかわりが、周囲の子どもにも、それぞれが気になったことを尋ねたいという気持ちをもつことに繋がっていった。保育者が一方的に伝えるのではなく、子どもの興味・関心を捉えて、雛飾りについて伝えたり見ることができるように配慮したりすることが、意欲的に保育者の話を聞こうとする姿勢や、対象への興味・関心を高めることにつながっていることを感じた。

2-3. 雛製作に興味をもつことをねらいとした導入

実践日／時間／場所		平成 31 年 2 月 22 日（金）／ 10：15 ～ 10：45 ／年中・長組保育室，ホール	
ねらい	雛製作に関心をもつ。		
事前準備	他学年の雛飾り製作の進歩状況について各担任に確認し，年少児が参観することについて了承を得る。		
活動	子どもの姿・言葉	保育者の言動・援助・配慮	
手遊びをする	・手遊びが始まると，座ったり保育者の方を向いたりして，保育者に集中を向けている。	・手遊びをし，保育者の話に気持ちを向けられるようにするとともに，落ち着いて次の活動に移行できるように配慮する。	
絵本を読んでもらう	・興味をもって，絵本「3月3日のたからもの」を見ている。	・関連する絵本を読み，雛祭の話題につなげる。	
保育者の話を聞く	・「Aくんもつくってはる？」と仲の良い年中児の名前を挙げる子どもがいる。 ・保育者の声を受け，「見に行こう」と同調する子どもがいる。	・年中・長児が雛製作をしていたことを伝え，作品を見せてもらうことを提案する。	
年中児の作品を見る	・年中組の保育室にはりきって向かう。 ・保育室に年中児がいなかったため，自ら保育室に入り，年中児がつくった雛製作を見付けて，「あった!」と見付けたことを喜ぶ子どもや，馴染みのある年中児の作品がないか見渡す子どもがいる。 ・「これは誰の?」と保育者に尋ねる子どもがいる。	・年中児がつくった雛製作を手にとり，皆に見えるように示す。 ・「年中さんは折り紙でつくらはったんやね」と素材を紹介する。 (年中組の製作：折り紙を主活動として，保育者主導型で取り組んだ製作)	

<p>年長組の製作過程を見る</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・つくられた雛飾りの手法が同一であることもあり、年中児の雛製作を少し見ると、保育室の他の環境へと興味を移す子どももいる。 ・保育者の問いかけを受け、「年長さんのも見に行こう」とはりきる子どもがいる。 ・「S（自分の名前）のお姉ちゃん月組!」「Aくんもいはるかなあ」と親しみのある年長児の名前を挙げる姿が見られ、製作物よりは、年長組に行くことに期待をもつ。 ・走って年長組に向かう子どもがいる。 ・扉がしまっているので、窓から年長組の様子を眺めている。 ・同時在園の姉の名前や、知っている年長児の名前を呼んだり手を振ったりする子どもと、年長児の様子をじっと見る子どもがいる。 ・年上の子もたちに少々委縮し、ややおとなしめの様子が見られる。 ・年長児の様子や製作物をじっと見ている。 ・「すごいなあ」と保育者に伝えたり友達同士で会話をしたりする子どもがいる。 ・「これなに!？」と年長児がつくっている人形や装飾に興味を示すが、直接年長児には聞けず、保育者に尋ねる子どもがいる。 ・「Sくんのお姉ちゃん」と呼びかけ、知っている子どもの作品に関心をもつ子どもがいる。  <ul style="list-style-type: none"> ・年長児の様子や製作過程に興味深く見ている子どもがいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・タイミングを見て、「年長さんはどんなふうにつくらはったんやろう」と問いかけ、年長組の製作活動の様子や作品を見ることに気持ちを向け、様々な表現方法に触れられるようにする。 <p>(年長組の製作：人形については折り紙を用いた保育者主導の製作、組み立てや装飾については自由製作)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年長組の担任に、入室し参観をすることの了承を得る。 ・「すごい!これ、Gちゃんがつくったん!」「自分で考えたんがすごいねえ」などと年長児にことばがけ、それぞれの姿を認める。 ・年長児に「Sちゃんのは、どうやってつくったん?」「これはどうなってるん?」などと尋ね、年長児の思いや言葉を引き出し、間接的に年少児に伝える。 ・「これは壁に飾るようにしたんやなあ」「いろんな雛飾りがあるなあ」と、年長児の発想や工夫を認めながら、年少児に対し、色々な製作方法があることに気付けるように援助する。 ・子どもが関心をもっている点について、保育者が年長児に尋ねたり、子ども自身に尋ねてみるよう促したりして、製作方法への興味が膨らんでいくよう援助する。
--------------------	--	--

<p>廊下で集まり、保育者の話を聞く ホールに移動する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者と一緒に保育室を巡る子どもがいる。 ・「M（自分の名前）もつくりたい」と保育者に伝えに来る子どもがいる。 ・友達の「つくりたい」という言葉を聞き、「つくりたいなあ」と同調したり、「Aくん（自分の名前）もつくりたい!」と言ったりする姿が見られる。 ・保育者のことばがけを受け、「ありがとう」と口々に伝える。 ・年長児に手を振る子どもがいる。 ・保育者の投げかけや友達の言葉を受け、「いいね〜」「私もつくる!」と言う子どもがいる。 ・「イエーイ!」と手をあげたり、「Tちゃん、一緒に行こう」と手をつないだりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「じゃあ M ちゃんもつくろうか」と子どもの思いを受け止める。 ・他の子どもからも「つくりたい」という声が上がり、「つくるの、楽しそうやなあ」と答え、思いに共感する。 ・「年長さん、ありがとう。みんなの雛飾りを見せてもらって、すごいなあと思ったよ」と感想を伝え、「つばみ組さん、お兄ちゃんお姉ちゃんに、素敵なのを見せてもらって何て言おうか?」と問いかけ、つながりをもつきっかけとなるように配慮する。 ・子どもの声を拾い上げ、「つばみ組さん、お雛様つくりたいって言ってるお友達がいるんやけど、どうする?」とクラス全体に投げかける。 ・「じゃあ、もう一回ホールに雛飾り見に行って、どんなお雛様つくるか考えてみようか」と伝え、目的意識をもって雛飾りを見ることができるようにことばがける。
<p>雛飾りを見る</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・雛飾りの前に座る  <ul style="list-style-type: none"> ・保育者の声を受け、扇について「扇子」と答える子どもがいる。 ・ほとんどの子どもが無言であったり首をひねったりしていたが、「笏」と言う子どもがいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「みんなが見えるように座りましょう」とことばがける。 ・「お雛様が持ってるもの、なんていう名前やったっけ?」と、先日雛飾りを見た時の印象や記憶がどのくらい残っているのかを把握する。 ・「扇子」という声を受け、「似てる! 扇っていう名前やったな〜」と答える。 ・「お内裏様の持っはるのは?」尋ねる。 ・「すごい! よく覚えてたね」と子どもの声を受け止める。

保育室に戻る	<ul style="list-style-type: none"> ・烏帽子について保育者に尋ねられ、「帽子」と答える子どもがいる。 ・「冠」と答える子どもがいる。 ・保育者に認められ、同一の子どもが「だって先生言ってたの聞いてたし」と答える。 ・「後ろの金色の何なん」と新たな質問をする子どもがいる。 ・「なんかお掃除するやつ持ってるやん」と先日には気付かなかったものに目を向ける姿が見られる。 ・「え〜!」「何でやねん」と保育者に言葉を返したり、ずっこける振りをしたりしている。 ・「これおうちにもあんねん」「怒り上戸顔赤い」などと、気付いたことや思ったことを言う子どもの姿が見られる。 ・それぞれに気になっているものに注目しながら、全体的に落ち着いて雛飾りを見ている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「お内裏様がかぶってはるものは何かわかる?」 ・「おいしい!」とほほえみ、「烏帽子っていう名前!」と名称を伝える。 ・「お雛様が頭にのせてはるのは?」と子どもたちに尋ねる。 ・「よく覚えてたなあ」と保育者の驚きを伝える。 ・「金屏風っていって、おめでたいときに後ろに立てるんやって。先生もこないだお友達の結婚式行ったとき、後ろに置いてあったよ」と保育者の経験を交えながら答える。 ・「ほんとや。よく気付いたね」と子どもの気付きを認めた上で、「きれいにして気持ちよくしてはるんかなあ。先生のおうちにも掃除しに来てもらおっかな」と答える。 ・子どもから大方の質問が終わったタイミングで、「じゃあ今日はお雛様とお内裏様をつくろうか」と目的を明確にする。 ・「どんなんつくろうか考えたり、飾りとか持ち物とかで自分が気になるものを見たりしてから行こうか」と投げかけ、それぞれの子どもの視点で雛飾りを見ることができるよう配慮する。 ・「今日はお人形さんをつくって、金曜日に、他の道具とか、こんなふうにつくりたいな、っていうものをつくろっか」と活動の流れを伝え、見通しを持てるようにする。 ・保育室に戻るよう声をかける。
--------	--	---

【考察】

はじめは、他学年の保育室に行くことや馴染みのある年中・長児への親しみをもとに、作品を見ることに気持ちを向ける姿が見られたが、作品や取り組み過程を見的过程中で、作品自体に興

味・関心を膨らませていく様子が見られた。

年中児の作品は、どの子どものものも同じ素材・手法でつくられているため、一つの作品を見ると、すぐに他の環境に興味に移る姿が見られたが、年長組に行った際には、様々な素材・




手法でつくられていることや、年長児が実際に取り組んでいることから、色々な作品や取り組み過程に興味をもって見る様子が見られた。素材やつくり方について関心はあるが、年長児には直接聞けず、保育者を介すことで、他学年の作品にかかわりをもつ様子も見られた。その中で、「つくりたい」という声が聞かれたように、作品や取り組み過程への興味・関心が、製作活動への意欲につながっていく様子がうかがえた。




製作活動への意欲や、製作活動に対する大まかなイメージをもつことができた姿を捉え、子ども自身が、つくることを踏まえて雛飾りを見ることができるよう、改めて雛飾りを見に行くことを投げかけた。「イエーイ」と喜んだり、友達と手をつないだりしてホールに向かい、す

ぐに雛壇の前に座って雛飾りに目を向ける姿が見られ、雛飾りへの関心の高まりと、製作活動への意欲から、雛飾りを見ることへの気持ちを高めている様子がうかがえた。改めて雛飾りを見ることで、先日保育者から聞いた話を思い出したり、新たに気になった道具について保育者に尋ねたりしながら、雛飾りへのイメージを明確にしていく様子がよみとれた。

また、一部の子どもが「つくりたい」と言ったことや、保育者がその言葉を取り上げクラスの子ども達に投げかけたことに対して、「いいね～」「私もつくる!」と言う子どもの姿が見られ、友達とのつながりができていることで、クラスの皆で一緒に何かをするということを楽しむようになっていることを感じた。

2-4. 製作活動1日目 人形づくり

実践日／時間／場所		平成 31 年 2 月 22 日（金）／ 10：50 ～ 11：45 ／年少組保育室	
ねらい	自分なりのイメージをもち，つくることを楽しむ。		
事前準備	千代紙，丸型画用紙（白色），てんし（冠・扇・烏帽子・笄），おかずカップ，R1 容器，ヤクルト容器，紙コップ，トイレットペーパー芯，セロハンテープ，手拭きタオル（のり用），サインペン		
			
活動	子どもの姿・言葉	保育者の言動・援助・配慮	
椅子に座り，保育者の話を聞く	・保育者の言葉を受けて，「イエーイ！」と言ったり手を挙げたりしている。	・「じゃあ早速お人形つくろっか」とことばがける。“雛飾り”ではなく，“人形”というふうに製作対象を絞って明確にすることで，製作工程に見通しをもち，製作活動自体へのイメージをもちやすくしたり，目的をもって取り組んだりすることができるように配慮する。	
		・一通りの素材を手短に紹介し，どのような素材があるか把握できるようにする。	

<p>素材を取りに行く</p> <p>お雛様・お内裏様などの人形をつくる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・素材を一通り見てから手を取る子どもと、見たものにすぐに手を伸ばす子どもがいる。 ・「はさみ持って来ていい?」と保育者に尋ね、自分の道具箱から持って来る子どもがいる。 ・友達と保育者の会話を聞き、のりやパスを道具箱から持って来る姿が見られる。 ・R1 容器やトイレトペーパー芯、紙コップ等に千代紙を巻き付け、テープやのりで貼り付け、人形の胴体をつくる姿が見られる。  <ul style="list-style-type: none"> ・R1 容器に千代紙を巻き付け、千代紙の余った部分を、R1 容器の飲み口の中に入れて込んで、大きさを合わせる子どもがいる。 ・カップや容器の大きさに合わせ、千代紙を必要な大きさに切ってから、のりやセロハンテープで巻く子どもがいる。また、千代紙をカップや容器に貼り付けてから、千代紙の方が大きいことに気づき、千代紙を切るこどもがいる。   <ul style="list-style-type: none"> ・折り紙の角と角を合わせて折ったり、しっかりと折り筋をつけたりして、丁寧に折り進めながら人形をつくる子どもがいる。 ・じっくり取り組む姿が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・素材について、「使う分だけ持って行って、足りなくなったらまたおかわりしに来たらいいしね」と伝え、自由に扱って良いことを知らせる。 ・グループごとに素材を取りに行くようにことばがけ、混雑しないように、また、自分のペースで素材を選ぶことができるように配慮する。 ・「うん。自分がいるもの持って来てね」と答え、子どもの判断で必要な用具を持って来るようにことばがける。 ・のりを持って来る子どもの姿に応じ、手拭きタオルを出す。
--	--	---

・「これも使っていいの？」と金色の折り紙を半分にしたもの（保育者が次の工程で環境に加えようと考え、素材コーナーとは別の場所に用意しておいたもの）を見つけて持って来る子どもがいる。その後、じゃばら折りにし、「金屏風」をつくり、保育者に「こんなんつくった」と見せる。

・千代紙を三角や四角に折って、胴体に見立てる子どもの姿が見られる。

・丸型画用紙にクレパスやペンで顔（目・鼻・口・髪・頬・眉毛等）を描き、千代紙や容器でつくった胴体に貼り付ける子どもがいる。

・丸型画用紙を自分の分と共に友達の分も持って来て、「こんなんあったで」と言って渡す子どもがいる。相手の子どもは、「それ使わへん」と受け取らず、折り紙の一部分を折り返し、「顔」を描く部分をつくっている。素材を持って来た子どもは、保育者が見ているのに気づき、「Kちゃん使わへんねんてー」と言って素材を返しに行く。

・胴体や顔に、扇・冠・笄・烏帽子などのてんしをのりで貼り付ける子どもがいる。てんしをセロハンテープで貼り付ける子どもの姿は見られない。



・三角に折った折り紙の両端を、中央に折り合わせて袖に見立てる子どもがいる。

・何に使用するのか分からなかったが、普段思いをもって取り組む様子が見られるので、「いいよ」とだけ答える。じゃばら折りで金屏風をつくる発想や、思いを膨らませてつくっている様子に驚きと関心が入り交じり、「うわあ、すごい。りぼんをつくる時の折り方でつくったんやなあ。Kちゃんの工夫がすごいなあ」とことばがける。

・「お雛様とお内裏様、にっこり笑って楽しそう」「着物、丁寧にアイロン（折り筋）あててるね」「紙コップの大きさに合うように折り紙切ってるんやなあ」などと、子どもの発想や工夫を言葉にして表し、個々の思いを受け止めたり認めたりする。また、その子ども自身だけでなく、周囲の子どもにも、一人ひとりの良さが伝わるように配慮する。

・友達を思う子どもの姿を受け止め、「ありがとう。Kちゃんも使うかなあって思ってたって来てくれたんやな」とフォローする。

・のりの感触を嫌がっていた子どもも、様々な遊びや取り組みの中で、感触に慣れ、自らのりを持って来て使用する姿を見て、成長を感じ、笑顔で見守る。

・折り紙の底辺を少し折り曲げ、人形が自力で立つように工夫をする子どもがいる。



・折り紙を丸めて立体的に顔をつくり、トイレット芯でつくった胴体に、セロハンテープで貼り付ける子どもがいる。



・丸型の画用紙を半分に切り、人形の名称や表情を文字で書き、千代紙に貼る子どもがいる。



・「うれしいひなまつり」の歌を歌いながらつくる子どもがいる。

・女雛、男雛の他に、三人官女や五人囃子など、印象に残っている人形をつくる子どもがいる。

・「二人官女」や「お内裏様とお雛様の赤ちゃん」など、自分で考えてつくったものを保育者に見せに来る子どもがいる。

・「これ怒り上戸やで」「私のお雛様」「先生、見て!」などと友達や保育者に見せたり、やりとりをしたりしながらつくることを楽しむ姿が見られる。

・「Sちゃん、文字書くの得意やもんなあ。このお雛様見たら、Sちゃんのってすぐわかるな」と得意なことをいかしてつくっている姿を認める。

・保育者も一緒に歌いながら、子どもの気持ちに寄り添い、楽しい雰囲気を感じられるよう配慮する。

・「仲間が増えて、お雛様達楽しそう」と子どもの世界観を大切にした言葉をかける。

・豊かな発想に興味を持ち、「うあ～素敵やなあ」と率直な思いを伝える。

<p>片付け</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「どうやってつくったん」と友達に尋ね、同じようにつくる子どもがいる。 ・「Mちゃんの可愛い」と友達にことばがける子どもがいる。ことばがけられた子どもは笑っている。 ・素材を使い終え、新たに素材を取りに行く子どもの姿が見られる。初めに素材を取りに行ったときと比べ、素材を見ながら自分の必要なものを選んで持って行く姿が見られる。 ・保育者が人形と話している様子を見て、友達と声を出して笑い合う様子が見られる。 ・自分がつくった人形を保育者に渡し、「私はこれつくったで」と保育者が人形と会話することを促す子どもの姿が見られる。 ・保育者が操る人形に話しかけられた子どもは、自分のつくった人形を持ち、「お雛様よ」とことばを返している。 ・保育者の姿を見て、他の子どもも、自分がつくった雛人形を持ち、人形になりきって「私ここにいるよ」「ほくYにつくってもらったんだけど」と保育者や友達と話をしている。  <ul style="list-style-type: none"> ・保育者に指示された机の上に並べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「Tちゃんのお雛様も可愛いよ。お友達のいいところ言ってあげられるTちゃんが素敵やね。Mちゃん、嬉しいね」とことばがけ、友達からことばがけられた子どもとことばがけた子どもの思いに共感する。 ・子どものつくった人形を手に取り、「あなた、誰につくってもらったの？とっても素敵な着物ね」「冠までつけて、おしゃれじゃないの」などと、他の子どもがつくった人形に話しかける。 ・子どもから差し出された人形を持ち、人形になりきって、他の子どもの人形に「あなたは誰なの？」と話しかける。「お雛様よ」と返された保育者は、「私もなの。一緒ね」などと返しながやりとりをする。 ・AとSが持ってきた人形を持ち、「私、素敵でしょ。私だって素敵よ。だってAちゃんにつくってもらったんだから。私はSくんにつくってもらったのよ。いいでしょ」などと子どもが持ってきた人形同士が話している演出を行い、子どもが自分のつくったものに価値を感じることができるよう援助する。 ・子ども同士の会話が増えてきたので、保育者が話すことを控え、子ども同士のかかわりを大切にすることができるように見守る。 ・大体の子どもがつくり終わったタイミングを見て、つくった人形を一か所に集めて置くようにことばがける。
------------	---	---

	<p>・周囲が製作活動を終えても、自分の納得のいくまで取り組む子どもの姿が見られる。</p> <p>・一旦活動を終えていた子どもが、昼食を終えると、再び人形をつくり、製作活動を継続させている。仲の良い友達も参加し、一緒につくることを楽しんでいる。</p>	<p>・作品を運び終わった子どもから、机の上を片付けるようことばがける。</p> <p>・まだつくりたい子どもは、自分のタイミングで終わることができるように、引き続き時間をとる。製作を終えた子どもには、絵本や折り紙、素材製作をすることを投げかけ、それぞれのペースを大切にすることができるよう配慮する。</p> <p>・最後まで取り組んでいる子どもが焦らず納得のいくまで取り組めるよう、傍で見守ったり、「一生懸命つくってるのが素敵やね」とことばがけたりする。</p> <p>・引き続き素材を置いておき、思いを継続したり自由に取り組んだりすることができるよう配慮する。</p>
--	---	--

【考察】

雛飾りや製作活動に対するイメージをもち、“やってみたい”という気持ちをもつことで、意欲的に製作活動に取り組む様子が見られた。製作を一旦終えてから、昼食後に再び活動を始める姿からも、取り組みの楽しさを感じていることがうかがえた。雛祭に関する歌を歌ったり、友達や保育者と会話を楽しみながらつくったりする姿も、取り組みを楽しんでいるからこそその姿であるといえる。

表現方法はさまざまで、折り紙を折る、素材を組み合わせる、文字で表すなど、それぞれの発想や好きなことをいかして表現していた。なお、折り紙で人形をつくる際には、角と角を合わせたり、折り筋をしっかりとつけたりしながら、指先を使って丁寧に表現する姿が見られた。予め決められた素材・つくり方ではなく、素材の選び方やつくり方を子どもが考え表現できるようにすることで、個性が表れている。年中・長児の作品を見たことも、製作のイメージ

を膨らませる要因となっているようだ。


取り組みの中では、「はさみ持ってきていい？」と保育者に尋ねる姿が見られ、イメージを表現するために、必要な用具を用いて、実現させようとしていることがわかる。そして、それぞれに必要な用具を持って来て使用する姿からは、これまでの遊びや取り組みの中で、はさみやのり、セロハンテープ等の用途を理解し、必要なものを判断し、扱えるようになっていたことを感じた。また、不必要な千代紙を容器の中に巻き込んだり、胴体の大きに合わせて千代紙を切ったりする姿や、平面の人形が立つように底面をつくる姿からは、イメージを表現するための工夫が感じられた。さらに、見たものを再現するだけでなく、見たものからイメージを膨らませて表現する様子も見られた。具体的には、「二人官女」や「お内裏様とお雛様の赤ちゃん」を表現する姿が見られ、事実からファンタジーの世界を広げている様子がうかがえた。




友達につくり方を尋ねて、同じようにつくったり、友達とやりとりをしながらつくることを楽しんだりする姿からは、友達とのつながりができていることが感じられる。保育者が子どものつくった人形を使ってやりとりをすると、友達と笑い合ったり、自分がつくった人形を保育者に渡して会話することを促したり、子どもたち

同士で人形を用いてやりとりが始まるなどの様子も見られた。製作物の世界観が広がると共に、自分がつくったものに価値を見出していることがうかがえる。また、保育者の援助により、他者との応答的なかわりが広がっていることがわかる。

2-5. 製作活動2日目

それぞれの発想やイメージ、表現を大切にした取り組み

実践日／時間／場所 平成 31 年 2 月 25 日（月）／ 10：30 ～ 11：45 ／年少組保育室		
ねらい	それぞれの思いや発想をいかしてつくることを楽しむ。	
事前準備	画用紙（色々な大きさ・色）、折り紙（15cm角・多色〈金色の折り紙は 15cm角サイズを 1／2 に切り、長方形にしたもの〉）、千代紙（色々な大きさ・かたち）、モール、てんし（桃・橘）、プラスチック容器、空き箱、発砲トレイ、手拭きタオル、サインペン、ボンド	
		
活動	子どもの姿・言葉	保育者の言動・援助・配慮
椅子に座る 歌を歌う 保育者の話を聞く	<ul style="list-style-type: none">・「うれしいひなまつり」を歌う。・全体的に落ち着いて話を聞いている。・自分の人形を取りに行く。	<ul style="list-style-type: none">・「うれしいひなまつり」のピアノ伴奏を弾く。・「金曜日は、折り紙とか入れ物とか使って、素敵なお雛様とお内裏様ができたね」とことばがけ、活動を振り返ることができるようにすると共に、今日の取り組みに繋げる。・「今日は、お人形のほかにつくりたいなと思うものをつくったり、どうやって飾るかを考えたりしながらつくろっか」と伝え、活動に見通しをもてるように配慮する。・素材を簡単に紹介し、素材をおおまかに把握できるようにすると共に、素材からつくるものへのイメージを膨らますことができるように配慮する。・自分のつくった人形を取りに行くようことばがける。

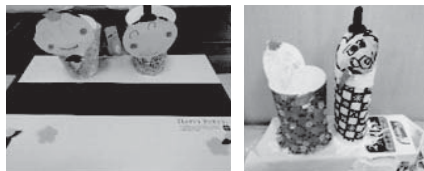
<p>素材を取りに行く</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・素材を見渡してから選び取る姿が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに順番に呼び、混雑しないよう、また、自分のペースで素材を選択することができるよう配慮する。
<p>つくる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の道具箱から、のりやはさみ、パスなど、それぞれに必要なものを道具箱から出して持ってくる。 ・自分の作品をつくりながら、友達の様子を見ている子どもがいる。  <ul style="list-style-type: none"> ・製作途中で、何度か材料を取りに行く姿が見られる。 ・空き箱（机に見立てている）の周りで人形を動かしながら、「先生、見て。お雛様、机のまわりで遊んではんねん」と伝える子どもがいる。 ・友達に刺激を受け、金色の折り紙をじゃばら折りにして、金屏風をつくる姿が見られる。 ・画用紙を折り、台座をつくって、その上にお雛様・お内裏様をボンドで貼り付ける子どもがいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発想やイメージをもとに、素材や人形とかかわっている様子を受け止め、子どもが動かしている人形に話しかけ、子どもの世界観に寄り添うことができるよう配慮する。 ・「1枚の紙がこんなふう立つようになるなんてすごい」と製作過程や発想に関心を寄せる。

・人形が発砲トレーに、のりでは貼り付かず、人形や発砲トレーについたのりを手拭きタオルでぬぐいとり、セロハンテープで貼りつける子どもの姿が見られる。

・画用紙に人形を貼り付けるが、人形が画用紙のサイズに収まらず、新たに画用紙を持ってきて台紙が大きくなるように付け足す子どもがいる。

・作品が大きくなってきて机にのりきらず、床で作業をする子どもがいる。

・空き箱や牛乳パックの上に、のりやセロハンテープ、ボンドで人形を貼り付ける姿が見られる。橘・桃のてんしを貼る子どももいる。



・画用紙や折り紙で、毛氈を再現する子どもがいる。

・画用紙をじゃばら折りにし、折り筋をつけて、ひな段に見立てている子どもがいる。



・一枚の画用紙を土台にし、筒状にした画用紙を平行に貼り付けている。そして、筒の面に平面の人形を貼り、立体的につくった人形は土台の上に配置して、平面・立体の人形どちらもが同じ土台に載るようにつくる子どもがいる。



・子どもの傍に座り、様子を見守る。

・一人ひとりの様子や作品を見守りながら、「お雛様嬉しそう」「飾るのが楽しみやねえ」「端っこまでのり貼ってるから、お雛様はがれへんな」「丁寧につくってるなあ」などとそれぞれの作品や製作過程を認める。

・「折り曲げてつくってるんかあ。すごいなあ。雛飾り、段になってたもんなあ」と子どもの発想に驚いたことをそのまま言葉にして表現する。

・立体的な人形の間に平面の人形を配置し、両側を支えにすることにより、平面の人形を立たせようとする子どもがいる。



・折り紙でつくった人形の底辺を折り曲げてのりづけし、人形を立たせようとするが、倒れてしまうことで、おかずカップを新たに持ってきて、人形の支えにする子どもがいる。



・空き箱・空き容器・卵カップ等を組み合わせ、段差をつけて、雛壇を表現する子どもがいる。女雛、男雛を奥に配置したり、折り紙を筒状に丸めたもの（木に見立てている）に、桃のてんしを貼ったりして、見たことを再現しようとしている。



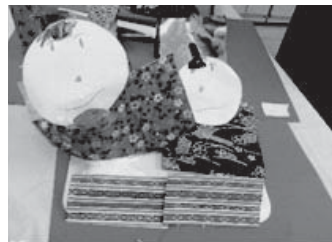
・卵パックの凹凸にトイレットペーパー芯で作った人形をはめこみ、並べる子どもがいる。R 1 容器でつくったものが凹凸の上にうまくのらなかったことで、セロハンテープで貼り付け固定している。



・折り紙を四角に折り，角を折って円形に近づくようにし，モールを貼り付け，ぼんぼりをつくる子どもがいる。また，折り紙を長細く折って，木の幹をつくり，先端に桃のてんしを貼り，桃の木を表現している。それら2つを立たせようとモールや折り紙の先を折り曲げて箱に乘せるが，すぐに倒れてしまうことから，空き箱の切り込みにモールと折り紙の先をはさみ，それぞれが自力で立つように工夫している。



・人形をトレーの上に乘せ，トレーの側面に千代紙の切れ端を貼り付け，座布団に見立てる子どもがいる。



・じっくりと集中して取り組む姿が見られる。

・人形を土台に貼り付けてから，新たに人形をつくり「またつくった!」と保育者に見せる子どもがいる。

・「見て。家族になるようにお雛様とお内裏様の子どもをつくった」とイメージを膨らませてつくり，友達や保育者に伝える子どもがいる。



	<p>・つくった人形を持って、ゆらゆらと動かしながら、「怒り上戸と泣き上戸が宇宙船に乗ってるねん」と保育者に見せに来る子どもがいる。</p>  <p>・「これ使う?」と持ってきた素材を友達にも使うかことばがける子どもがいる。相手の子どもは「ありがとう」と返事をし、受け取っている。</p> <p>・「Aちゃんのどうやってつくったん」と聞かれ、「箱に画用紙貼ってつけてん」と答え、友達とやりとりしながらつくり進める姿が見られる。</p> <p>・「これ誰?」と友達に聞かれ、一体一体について、「これが、お雛様でこれがお内裏様で、これが三人官女」と紹介する子どもがいる。教えてもらった子どもは、「私はお雛様とお内裏様にしてん」と返答している。</p> <p>・保育者が友達の作品を認めているのを聞いて「Mちゃん、良かったな」と言葉がけて、友達の喜びに共感している。</p>	<p>・全体的に完成させることができた様子を見て、できた子どもから、作品を一か所に集めて置くようにことばがける。</p> <p>・子どもが持ってきた作品を見ながら一人ひとりを認め、満足感を味わったり、自己肯定感をもったりすることができるように配慮する。</p> <p>・作品を運んだ子どもから、余った素材を元の場所に戻したり、自分の用具を片付けたりするようにことばがける。</p>
片付け	<p>・自分の作品が壊れないように、そっと運んでいる。</p> <p>・材料をいくつか取り、使わないままに置いてあるものもある。</p> <p>・保育者のことばがけを受け、つくり終わった子どもは、素材や用具を片付けている。</p>	

	<ul style="list-style-type: none"> ・「これ，Tくんがつくらはったやつ」と手を洗いに行った子どもの作品を，他の子どもが持って来る。 ・最後まで集中して取り組んでいる子どもがいる。 ・まだ続きをつくりたい思いがあるながらも，集中が途切れている子どももいる。 ・完成したものを「今日持って帰りたい」と言う子どもがいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・製作活動を継続している子どもに声をかけ，最後までじっくりと取り組んでいることについて，自信をもつことができるように配慮する。 ・まだ完成しておらず，完成させたい思いがあるけれども集中が途切れている子どもに対して，昼食後や明日以降も継続することができる旨を伝え，それぞれのペースを大切にしよう心掛ける。 ・完成した子どもは絵本を読んで待つようにことばがける。 ・全員が活動を終えた際に，「世界に一つだけの雛飾りができたね。ここに飾っておいて，しばらくみんなのこと見守ってもらおう」と活動を締めくくる。 ・ボンドやのりが乾いたら持って帰ることを伝える。 ・本日完成せず，まだ継続させたい思いがある子どもについて，引き続き時間と場所を確保する。
--	--	---

【考察】

様々な素材に触れつくことの楽しさを味わう中で，イメージをかたちにしようという思いが感じられた。2・4では，折り紙で作った平面の人形が立体になるように底面をつくる姿が見られたが，ここでは，画用紙を筒状にしたものに平面の人形を貼り付け，立体にする姿が見られた。また，様々な素材を組み合わせで雛壇をつくったり，モールや折り紙，てんしを用いて桃や橘の木をつくり，人形の上や横に配置したりして，見たことを再現するための工夫が感じられた。素材の使い方やつくり方において，それぞれに違った発想での工夫が感じられる。

イメージを実現させようとする中で，つくった人形が，発砲トレーにのりでは貼り付かず，

セロハンテープで付け直したり，土台の画用紙に雛人形が収まらないことで，新たに画用紙を持ってきて土台を大きくしたりして，うまくいかないことで，試行錯誤する様子も見られた。

見たものを再現するだけでなく，「怒り上戸と泣き上戸が宇宙船に乗ってる」様子を表し，保育者に見せる姿からは，事実とファンタジーの世界を織り交ぜながら表現していることがうかがえた。「またつくった！」と新たに雛人形をつけ加える姿からは，つくることの楽しさを感じている様子がうかがえた。楽しんでつくる過程の中で，イメージを広げたり，意欲を膨らませたりしていることがわかる。また，つくることの楽しさや，イメージをかたちにしたいと

いう意欲が、作品を仕上げるための集中力にもつながっている。

友達につくり方を尋ねたり、それに答えたりする子どもの姿が見られ、友達と一緒にすることも、楽しさの一つになっていることを感じた。やりとりを楽しむ背景には、友達との関係が育まれていることや、言葉の育ちがある。片付ける際には、友達の作品を運び、誰がつくったものを保育者に知らせる姿が見られたが、友達の作品を認識していることから、友達の取り組み過程や作品に関心をもって見ていたことがうかがえた。

作品が壊れないように丁寧に運ぶ姿や「今日持って帰りたい」という子どもの姿からは、つくったものを大切に扱う気持ちやつくり上げた喜びを感じていることがよみとれた。

3. 結果と考察

本実践の中で見られた子どもの姿やことばをもとに、子どもの育ちを分析し、環境要因型製作活動の意義とする。また、本実践で見られた子どもの育ちを支える視点として、保育者の援助について述べる。

3-1. 環境要因型製作活動の中で見られた子どもの育ち・意義

環境要因型製作活動では、いかに教えるかではなく、いかに子どもの心が動いているかが基盤となる。つまり、心の動きがあつてこそ、意欲が芽生え、主体的に取り組んでいくことができるのだ。そのことが、豊かな表現につながるといえる。よって、完成した作品だけでなく、子どもの様子や言葉から見られる育ちを、環境要因型製作活動の意義として、以下の8項目に整理する。

(1) 個々の発想をいかした表現の表出

思い思いに素材を選んだりつくったりする姿

が見られ、折り紙を折る、素材を組み合わせてつくる、文字で表すなど、それぞれの発想や好きなことをいかして表現している姿が見られた。また、丸型に切られた画用紙を取って使用せずに折り紙で折った部分を顔に見立てたり、折り紙を丸めて立体的に顔をつくったりする姿からは、自分の思いをもって取り組んでいることがうかがえた。様々な素材から自分で必要なものを選んだり、組み合わせたりしながら、それぞれの思いや発想をもとにかたちにしたり、もしくは表現していく中で結果として、かたちになっていったりする様子が見られた。

(2) 思いをかたちにしていくための思考力・判断力の芽生え

それぞれの手法で平面の雛人形を立体にする、様々な素材を組み合わせて雛壇をつくる、素材の大きさを調節するなど、色々な場面で、それぞれにイメージしたことを表現するために考えたり試したり判断するなどしながら製作に取り組んでいる様子が見られた。

また、のりで貼り合わせることができないものについて、セロハンテープで付け直す子どもの姿が見られ、試行錯誤しながら用具の使い方、用途について、実体験として習得している過程が確認できた。

(3) 聞いたこと・見たことをもとに、イメージを膨らませてかたちにする表現力・創造力

金色の折り紙をじゃばら折りにして金屏風をつくったり、モールや折り紙、てんし等を組み合わせでほんぼりや桃をつくったりする姿から、聞いたこと・見たことをもとに、自分のイメージをもち、イメージしたことを表現しようとしていることが感じられた。

素材を組み合わせて雛壇を再現したり、立体的に雛飾りを製作したりする表現方法の広がり

は、雛飾りを見たことのほかに、年長児の製作過程を見たことも刺激になっていると考えられる。

また、見たことの再現にとどまらず、「二人官女」「お内裏様とお雛様の赤ちゃん」をつくったり、「怒り上戸と泣き上戸が宇宙船に乗ってる」様子を表現したりする姿が見られ、事実とファンタジーの世界を織り交ぜながらつくり上げる姿が見られた。なお、つくったものを友達や保育者に見せたり、ファンタジーの世界を膨らませながら取り組んだりしている姿は、心が動いているからこそその姿である。

（4）巧緻性

思いをかたちにしていくにあたり、切る・貼る・描くといった工程が必要になる。作品を完成させるにあたり、思いやイメージと共に、それを実現させるだけの巧緻性がなくては、表現することが困難である。本実践では、折り紙の角と角が合わさるように手先の動きを調整したり、手先を使ってしっかりと折り筋をつけたりして、手先を器用に扱いながら取り組む様子が見られた。また3歳児は個人差が大きいですが、決められた着地点を目指して取り組むのではなく、自分でイメージをしたことに向かって表現していくので、思考や巧緻性に対して、それぞれの発達にそった方法で表現することができる。

（5）いきいきとした言葉のやりとり・人とのかかわり

一部の子どもが「つくりたい」と言ったことに賛同したり、友達の作品に刺激を受けたり、つくったものを用いて友達とやりとりをしたりして、様々な場面で、人とのかかわりを楽しむ姿が見られた。保育者に思いを伝えたり、友達同士で話したりしながらつくる様子の根底にあるのは、“楽しい”“伝えたい”“分かち合いたい”

という思いである。こういった思いが、人とのかかわりを楽しむことに繋がっていると考えられる。つまり、心の動きが、言葉のやりとり・人とのかかわりにもつながっているのだ。

また、保育者が子どものつくった人形を用いてやりとりする姿から、子ども達は、製作という枠を超え、自分がつくった人形を使ってやりとりをすることの楽しさ、人形を介して友達や保育者とのかかわる楽しさを感じていた。

（6）意欲・集中力の高まり

雛飾りや製作活動に対するイメージをもち、やってみたいという気持ちをもつことで、意欲的に製作活動に取り組む様子が見られた。一旦雛人形の製作を終えてからも、その日の昼食後や、人形を土台に貼り付ける際に再び人形をつくり始める姿からも、取り組みの楽しさが意欲につながっていることがうかがえる。雛祭に関する歌を歌ったり、友達や保育者と会話を楽しみながらつくったりする姿も、取り組みを楽しんでいるからこそその姿であるといえる。

また、製作に意欲的に取り組むことで、集中したり、思いを継続させたりしている様子が見られた。“仕上げたい”、“自分の思いを実現させたい”という気持ちから、丁寧に取り組む様子が見られ、そういった思いも集中力につながっていることがうかがえた。

（7）友達に刺激を受けたり、友達の良さを認めたりする子ども同士の育ち合い

保育者から一方的に知識を与えられるのではなく、友達同士で刺激を受け、良さを感じた作品や工程を自分の中に取り込んだり、友達の作品を認めたりしていた。子ども同士で影響を与えたり受けたりする姿が見られ、育ち合いの場となっている。

また、同じ題材の中でも色々な素材を使って個々の発想をいかしてつくることで、違いを認

め、互いの良さを感じられる。これは、広く捉えれば、多様性を尊重し認めあうことにもつながっていくだろう。

(8) 学びの積み重ねの発揮

本実践での作品は、折り紙を使ってかたちを折る、ブロックや積み木、素材を使って見立てたり組み合わせたりする、粘土や砂・泥んこ遊びの中でかたちをつくるなど、これまでの経験がいかされたものとなっている。題材に合わせてかたちを考えながら折り紙で折る、素材の特徴を理解したりいかしたりしながら組み合わせる、文字で表すなど、それぞれの発想や好きなことをいかして表現している姿も、個々の子どもの育ちの表れといえる。

また、イメージを実現させるために、それぞれに必要な用具を用いて表現する姿が見られ、はさみ・のり・テープの用途を理解し、必要なものを判断し扱えるようになっている様子が見られた。用具の扱い方や用途を理解しながら取り組む姿からも、これまでの遊び・活動の中での経験や学びをいかして取り組んでいることがうかがえる。なお、扱い方や理解は、個々によって違いがあるが、3-1.(4)で述べたように、子ども自身の発達や経験にそったものとなっている。

3-2. 環境要因型製作活動における、子どもの育ちを支える援助

上述の8項目から分かるように、本実践は、様々な学びが総合的に育まれる結果となった。では、これらの育ちを支えるために、環境要因型製作活動を行うにあたって、大切になる視点はどのようなものであろうか。育ちを支える援助について、以下7項目に整理しながら論述する。

(1) 製作活動への意欲を引き出す導入

環境要因型製作活動では、保育者が意図する着地点がなく、子どもの思いが表現されることが大切になるため、いかに“つくりたい”と思えるかという子どもの心の動きが、製作活動を始めるにあたり、また、活動を豊かにするにあたっての基盤となる。子どもの心を動かすためには、ただ単に製作活動の時間を設けるのではなく、雛祭・雛飾りへの興味や関心をもてるようにしたり、これまでの過程で、製作の楽しさを感じられる経験を積み重ねたりすることが必要となる。

本実践では、製作活動までに、雛飾りを見る、絵本を読んでもらう、他学年の取り組み過程・作品を見るという経験を重ねている。その上で、子どもが“やってみたい”という思いをもつ姿を捉え、製作活動に移行している。決められた日程・時間に製作活動を入れ込むのではなく、子どもが興味・関心をもてるよう配慮し、製作への意欲を引き出すことが、取り組みをいかに豊かにするかということにつながるのである。

(2) イメージが膨らむ導入

本実践では、子どもの思いや発想をもとに表現することを大切にしているため、筆者から手本を示すことは一切行っていない。一方、イメージをもてるように、導入を丁寧に重ねている。

導入部分では、雛飾りや絵本のほか、他学年の製作過程や作品を見る機会を設けることで、製作へのイメージをもてるよう援助した。雛飾りを見る際は、ぼんぼりの灯りをその場でつけたり、人形や道具を手に取りながら、印象に残るように示したりしている。また、人形の表情や背景などについて、子どもが気付けるように投げかけたり、子どもの関心をもとに由来を伝えたりして、子どもがその場に主体的に参加で

きるよう配慮している。

なお、イメージがもちにくい子どもがいる場合は、時間や日にちにゆとりをもち、友達の様子を見て見通しをもてるようにしたり、保育者と相談しながら一緒に素材を選んだりして、子どもが“やってみたい”と思えるような工夫が必要である。ただし、イメージがもちにくい他、子どもが製作活動に消極的な姿には、自信の無さ、用具の扱いにおける不安、製作への関心の低さなど、様々な要因が考えられる。何に戸惑いをもっているのか、何が製作へと向かわせないのかについて、保育者は、普段の子どもの様子を踏まえて、様々な視点から心の動きをよみとり、援助していく必要がある。また、時間や日にちにゆとりをもって継続的に取り組んでいく場合は、個々により完成する時期に差がでることが予測される。その際、個々に製作し終わったものを順次展示し、さらにいうなれば、製作対象をイメージさせる雰囲気味わえるような展示の仕方を工夫し、製作に対するイメージを膨らませることも、有効な手立てとなるであろう。展示の工夫は、つくり終えた子どもにとっても、製作活動自体やつくりあげたことへの満足感につながる。

（3）素材の量・種類・質

製作過程では、自分のつくりたいイメージをもって素材を選ぶ子どももいれば、素材を見たり、触れたりしながらつくるなかで、イメージを明確にしていく子どもの様子が見られた。そのため、製作へのイメージや発想を膨らませることができるような素材の準備を行う必要がある。たとえば、千代紙は人形の着物、丸型の画用紙は顔を連想させる。しかし、それが製作キットとならないように配慮しなければならない。表現するための素材が限られると、子どものイメージが膨らまず、製作方法や作品に広がりが出にくい。そのため、色々な種類の素材が

求められる。たとえば、人形の顔をつくる際、年少児の姿をふまえて、顔を連想しやすい素材を準備したが、丸形の画用紙しかなければ、表現方法は限られてしまう。折り紙を丸めたり、折り紙を折って、その一部に顔を描いたりしていた姿が見られたように、他の素材があるからこそ、表現方法に個性が表れる結果となる。そう考えれば、カプセルやピンポン玉など、顔を連想させるような素材が他にもあったのではないかと反省する。

また、千代紙や画用紙、折り紙は、様々な大きさに切っておくことで、年少児でも扱いやすいように配慮している。素材を準備する際には、発達年齢に合った準備の仕方も工夫のポイントといえる。

さらに、一人ひとりの表現を大切にするためにも、人数に応じた数量や、選択できるだけの種類が必要である。

（4）それぞれの取り組み方の尊重

それぞれのイメージをもとに取り組むということは、自分で完成形を決めることができるということである。そのためには、予定していた製作活動の時間の枠にとらわれずに、子どもが満足できるまで取り組めるように時間を確保したり、日にちをまたいで継続したりすることができるようにするなど、時間的な配慮も必要である。

また、子ども自身が素材を選んだり製作工程を考えたりしながら取り組むことで、それぞれの発達課題に合った方法で表現していくことができることも環境要因型製作活動の良さである。

（5）子どもが主体

素材・工程を選択し判断したり、完成形を決めたりするのは、保育者ではなく子ども自身であることが、心を弾ませ、考えたり試したりす

る姿につながっている。子どもが主体的にモノ・コトに触れる過程は、遊びの中での大切な要因であり、遊びを通して学ぶ幼児期には、一斉保育の中でも、いかに子どもが主体であるかが、豊かな学びにつながるといえる。保育者が一方的に教えたり、到達点が決められた製作へ向かわせたりする保育は、子どもが主体であるとはいえない。幼児期の子ども達は、人・モノ・コトに興味をもち主体的にかかわっているときにこそ、豊かに学びを育んでいる。全ては子どもの心の動きからはじまるのである。

(6) 計画的、かつ柔軟な保育の展開

子どもがイメージを膨らませてかたちにしようとしたときに、のりやはさみ、セロハンテープなどの基本的な用具の使い方を理解し、扱えるようになっていないと、製作活動は困難である。したがって、これまでの遊びや取り組みの中で、子どもの興味や関心のある題材を用いて、用具の基本的な使い方について学べるよう、計画的に保育を展開してきた。結果、本実践では、用具の用途・扱いについて習得したことをいかして製作活動に取り組む様子が見られた。

また、経験不足や感覚過敏の特性から、1学期には、のりのぬるぬるとした感触を嫌がっていた子どもも、無理にのりを使わせるのではなく、これまでに砂・泥遊び、粘土、スライム、絵の具遊びなどの感触を楽しめるような遊びを取り入れる中で、様々な感触に触れ、慣れたり心地よさを感じたりするようになっていった。その結果、のりの感触にも抵抗が見られなくなっていることにより、製作活動の幅が広がっている。製作の楽しさを感じたり用具の使い方を学んだりする経験の積み重ねが、豊かに製作活動を展開することにもつながる。子どもの様子や発達課題から、どのような経験が必要であるかを考え、興味・関心に応じて遊びや取り組

みをサポートしていくことが、子どもの育ちを豊かにすると考える。

(7) 保育者のかかわり

それぞれの作品には、子どもの思いや個性が詰まっている。発想や工夫、感性、表現などをいかしてつくる姿に寄り添ったり、思いを汲み取り言葉にして伝えたりすることは、子どもが他者から認められることの喜びを感じ、自己肯定感を育んでいく上で大切である。

製作過程での子どもの様子をどのように受け止め、それぞれの良さを見いだすか、そしてそれをどのように言葉にして表現するかということは、その子どもの自信となるだけでなく、周囲の子ども達にとっても、友達の表現や良さを感じられる機会となる。ただし、その際に注意すべきことは、他の子どもとの比較をもとにしないということである。それぞれの子どもの製作過程や作品の中から良さを見いだすことが大切である。

保育者のそういった一人ひとりの良さを見いだすかかわりは、製作活動の中だけでなく、全てのかかわりで求められる。ありのままの自分が受け止められている・認められているという思いをもてるようにすることが、保育の根底にあるべきである。

また、応答的なかかわりも大切な視点である。導入部分では、保育者が一方的に伝えるのではなく、子どもの興味・関心を捉えて、雛飾りについて伝えたり、子どもが興味をもった雛道具を見ることができるよう配慮したりすることで、意欲的に保育者の話を聞こうとする姿勢や、対象への興味・関心を高める様子につながっていった。取り組みの中では、保育者が子どものつくった人形を使って会話をすることで、人形に命がふきこまれ、世界観が広がっている。そして、友達や保育者とやりとりすることの楽しさを味わったり、自分がつくったもの

の価値を感じたりすることにつながっていった。

こういった視点を踏まえて製作活動を展開することが、子どもの育ちを支え、一斉保育の中でも、個々の子どもの発想や個性をいかして取り組むことを可能にする。

4. 成果と課題

本研究では、一斉保育における環境要因型製作活動の意義と、子どもの育ちを支える援助について明確にすることを目的に、筆者の実践をもとに考察した。

具体的には、年少組で行った雛祭製作の活動において、子どもの姿や言葉から、子どもにどのような育ちが見られたかを、環境要因型製作活動の意義とした上で、その育ちを支える援助について分析した。

その結果、環境要因型製作活動の意義について、以下の8項目を示した。

- (1) 個々の発想をいかした表現の表出
- (2) 思いをかたちにしていくための思考力・判断力の芽生え
- (3) 聞いたこと・見たことをもとに、イメージを膨らませてかたちにする表現力・創造力
- (4) 巧緻性
- (5) いきいきとした言葉のやりとり・人のかかわり
- (6) 意欲・集中力の高まり
- (7) 友達に刺激を受けたり、友達の良さを認めたりする子ども同士の育ち合い
- (8) 学びの積み重ねの発揮

そして、環境要因型製作活動の中での、子どもの育ちを支える援助として、以下の7項目が大きな役割を果たすことを示した。

- (1) 製作活動への意欲を引き出す導入
- (2) イメージが膨らむ導入
- (3) 素材の量・種類・質についての配慮
- (4) それぞれの取り組み方の尊重
- (5) 子どもが主体であるという考え方
- (6) 計画的、かつ柔軟な保育の展開
- (7) 保育者のかかわり

子どもの育ちを支えるためには、上述のような専門的なかかわりが求められる。浅川(2009)は、子どもと保育者がともに主体である保育について検討を行う中で、一斉保育において、子どもが主体性を発揮できるようになるためには、目の前の子どもの姿から指導計画を立てることの重要性を述べている⁶⁾。つまり、一斉保育という決められた枠組みの中でも、子どもの姿を捉え、それをもとに、育ちを支える援助(1)～(7)で上述した教育的意図を発揮して保育を展開する中で、一斉保育の中での製作活動においても、子どもの思いを発揮して取り組むことができるのである。

環境要因型製作活動は、意欲をもって取り組む中で、表現を豊かにするだけでなく、積み重ねてきた経験をもとに、総合的に学びが育まれる有意義なものであるといえる。

しかしながら、幼児教育では主体性が大切といわれているにもかかわらず、製作活動においては、どのように子どもの主体性を発揮させることができるかについて、現場で検討されることが少ない。

その要因の一つは、それぞれの幼稚園の歴史と文化から、保育方法が習慣化されていることにあると考える。そして、その習慣化に疑問をもつことなく毎日の保育を展開する、保育者の意識の問題が挙げられる。そこには、課題意識の問題と共に、保育者の多忙による時間・心理的な余裕の無さという問題に加え、保育形態の見直しについての議論が不足している幼稚園の

体制的な問題が含まれている。

今後は、製作活動に限らず、様々な活動・行事についても子どもが主体となっているかについて、保育現場で一体となり、見直しや議論を重ねながら、保育・保育計画の実施・評価・改善を行い、子どもの学びが豊かなものとなるよう研鑽したい。

5. 謝辞

本論文の作成にあたり、最後まで温かく見守って下さり、指導を賜った佛教大学 教育学部教授 高橋司先生に感謝いたします。また、京都大学大学院 人間・環境学研究科 総合人間学部教授 大倉得史先生からは、重要な示唆を賜りました。熱く御礼申し上げ、感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 文部科学省, 幼稚園教育要領 第1章総則
- 2) 武内裕明 (2014). 「幼稚園の実習生は何を手掛かりに保育を構想するのか：ぶどうに目をつけた製作場面に関するインタビューから」『弘前大学教育学部紀要』, 111, pp.121-128.
- 3) 山田修平 (2017). 「幼児の表現を広げる製作環境設定の研究 (1) : — シャボン玉お絵描きを題材とした2つの環境設定」『淑徳大学短期大学部研究紀要』, 57, pp.73-87.
- 4) 片岡章彦 (2019). 「3つの『資質・能力』を踏まえた4歳児の育ちについて：自由遊び時間における『製作遊び』場面の事例分析」『幼年教育 WEB ジャーナル』, 2, pp.42-54.
- 5) 若山育代 (2013). 「幼児の好きな遊びにおける創造的な造形的見立てとは何か」『美術教育学会誌』, 34, pp.469-477.
- 6) 浅川繭子 (2009). 「子どもと保育者がともに主体である保育についての検討：自由保育と一斉保育の比較から」『植草学園短期

大学紀要』, 10, pp.67-78.

(さかた あおい 学校法人実乃里学園 自然幼稚園)

(たかはし つかさ 教育学科)

